

「潜在看護職」災害時に力を

南砺で救護法研修

看護師や保健師などの資格を持ちながら育児や介護などの事情で離職している「潜在看護職」を対象にした災害対応研修会が十九日、南砺市北川の市地域包括ケアセンターであり、現役を含めた看護師資格を持つ市民七人が応急救護技術を学んだ。

研修会は、南海トラフ地震に備え、潜在看護職を活用した地域ネットワーク構築の調査研究をしている日本福祉大看護学部(愛知県東海市)が主催。同大と市は二〇〇五年に結んだ友好協力協定の一環で、昨年から対面とオンライン形式で開いている。

名古屋掖済会病院(名古屋市) 副院長で救命救急センター長の北川喜己医師が講演し、けがの状態に応じて治療の優先順位を決める「トリアージ」の考え方を

紹介。その後、参加者はラップやタオル、雑誌といった生活用品を使った応急救護の方法を習得。砺波地域消防組合の救急救命士の指導を受け、気胸や骨折などの手当てを人形を使って実際にを行った。

研修を取り仕切る同大看護学部の新美綾子教授は「潜在看護職の市民がいれば医療者がいない場でも命をつなげることができる。目の前の命が守れることを自覚してもらえればうれしい」と語った。(広田和也)



生活用品を使った応急救護を学ぶ参加者ら＝南砺市北川の市地域包括ケアセンターで